おおわれた真実——元雑劇「救孝子」「殺狗勧夫」試論——

廣瀬玲子
専修大学文学部教授

はじめに

元雑劇の公案劇（裁判もの）には、王翛然が裁きをつける作品が二つある。[1] 元曲選本のタイトルによれば、「救孝子賢母不認屍」（「不認屍」と略されることもあるが、本稿では以下「救孝子」と略す）と「楊氏女殺狗勧夫」（以下「殺狗勧夫」と略す）である。王翛然は金代に実在した人物（王翛。字は翛然）で、『金史』の伝（巻一百五）は、「翛、性剛厳にして、事に臨んで果決す。吏民その威を憚り、豪右と雖も敢えて犯さず」と述べる。また、金人である劉祁の『帰潜志』（巻八）にも、法を犯したのが権力者であっても厳正に処分したというエピソードを載せる。吉川幸次郎は、王翛然および雑劇二作品について、次のように推測する。

「帰潜志」に「宋の包拯にも遠く過ぎたり」と時の人が評したと見えることは、包待制同様「説公案」の中の人物であったことを思わせる。この人物の登場する「殺狗勧夫」「救孝子」も、或いは講釈に出るのかも知れ

ない。[2]

包拯と同じように剛直な官吏としての声望ゆえに伝説が生まれ、裁判劇にも名を残すことになったのであろう。とはいえ、「救孝子」や「殺狗勧夫」において王脩然は、特に優れた能力を発揮するわけではない。では、王脩然はどのような役割を果たしているのか。いずれも裁きを下すのが王脩然であるのはなぜなのか。

本稿はこれらの作品の一つの読解を示すとともに、前稿に続いて同じ人物が裁きを下す二作品に潜んでいる構造の類似性を明らかにし、さらに裁判劇の普遍的な特徴について論じることとしたい。

一　「救孝子」のあらすじ

それでは、まず「救孝子」の各折のあらすじを示しながら解説を加えよう。[3]本劇の歌唱者は全篇を通じて正旦の李氏である。

1　第一折（場所は楊家）

あらすじ：大興府尹の王脩然が義兵の徴集に出かける。楊家の未亡人李氏が息子の楊興祖（二十五歳）と楊謝祖（二十歳）、興祖の妻の王春香とともに登場。興祖は武芸に長け、謝祖は学問を修めている。李氏は二十年余り前に夫を亡くし、息子たちが幼かったので軍戸としての兵役を免れていたが、今回は一名の徴兵に応じることにする。李氏が興祖を兵士に差し出そうとするので王脩然は興祖が妾の子なのではないかと疑うが、実

際は謝祖のほうがすでに亡くなった妾の子であったため、李氏に敬意をいだく。興祖は春香の弟が刀をほしがっていたことを思い出して春香に託し、家族に見送られて旅立つ。

本劇ではこの最初の折でいくつかの伏線が張られている。劇の最後に判決を下す王翛然が冒頭に登場することはその一つである。その王翛然に対して（と同時に観客／読者に対して）強く印象づけられるのは楊家の人々の「賢」である。まず、これまで息子たちの代わりに兵役についてくれた傭兵に対し、李氏は拝礼して鄭重に感謝の意を表す。礼にかなったふるまいである。次に楊謝祖。母親は武芸にすぐれる興祖が兵士に適任であるというが、弟の謝祖も自らが出征する夢を見て作ったという詩を披露、文才とともに気概を示す。武芸は得意ではないものの、謝祖も単なる文弱の徒ではないのである。その詩に感銘を受けた王翛然が謝祖を連れていこうとすると、李氏はそれに反して再び強く兄を薦めるので、王翛然は兄が継子なのではないかと邪推する。しかし実際は逆であった。

（王翛然云）噤声。這婆子、你原説道両個小廝随老夫揀一個去。那小的個楊謝祖、他夢見老夫僉軍、做下四句気概詩。我説道、是軍伍中得這等識字的人、可多得用処。你左来右去、則着大的個孩児去、説他有膂力可去得、小的個孩児軟弱去不得。我想這大的個小廝、必然是你乞養過房螟蛉之子、不着疼熱。那小的個孩児是你親生嫡養、便好道親生子着己的財、以此上不着他去。（…）兀那婆子、你説的是、万事都休、説的不是、張千、准備着大棒子者。（正旦云）大人、都是老身的孩児、着老身説甚麼那。（王翛然云）兀那婆子你説、你若不説呵、将大棒子来打呀。（正旦云）大哥二哥児也、我説也。説則説、你休怨者。（…）（正旦云）告大人暫息雷霆之怒、略罷虎狼之威、聴老身説一遍咱。亡夫在日、有一妻一妾、妻是老身、妾是康氏、生下一子、未曾満月、因病而

亡。這小的孩児楊謝祖、便是康氏之子。未及二年、和夫主也亡化過了。亡夫曾有遺言、着老身善覷康氏之子。経今一十八年、不曾有忘。此子与老身之子一般看承、則是不別夫主之言。為甚麽則教大的個孩児当軍去。那大小廝是老身親生的、陣面上有些好歹呵、這小的個孩児也発送的老身入土。（…）倘或小的個孩児当軍去呵、有些好歹、便是老身送了康氏之子。老身死後、有何面目見亡夫於九泉之下。只此老身本心、伏取大人尊鑒。（王脩然驚科、云）婆子請起、這等是老夫差了也。便好道方寸地上生香草、三家店内有賢人。依着你、則着大的個孩児当軍去、可准備軍装。

（王脩然いう）言葉を慎め。おい婆さん、さっきは二人の息子のうちわしが好きに選んでよいと言っておったではないか。あの若いほうの楊謝祖はわしが徴兵に来るのを夢に見て四句の気概を表す詩を作ったので、わしは軍隊の中にそういう文字を解する者がいると大いに役に立つと思ったのじゃ。ところがおまえはあれこれ理屈をつけて大きい息子を行かせようとし、やつは体力があるから大丈夫だが下の子は軟弱でだめだと言う。わしが思うに、上の子は養子なのでかわいくないが、下の子はおまえが腹を痛めた跡取り息子、いわゆる「実の子はお気に入りの宝もの」というわけで行かせないのだろう。（…）おい婆さん、本当のことを話せばそれでよいが、うそをついたら…　張千、太い棒を用意しろ。（李氏いう）お役人様、どちらもわたくしの子でございます。何を話せとおっしゃるのですか。（王脩然いう）これ婆さん、話すがいい、もし話さなければ太い棒で打つぞ。（李氏いう）息子たちや、話すことにするよ。話すことは話すが、どうか怨みに思わないでおくれ。（…）（李氏いう）お役人様、どうか雷霆のような怒りをしばしお静めになり、虎狼のような威勢を少しお収めくださって、わたくしの話をお聞きください。亡き夫が生きておりましたときには一妻一妾、妻がわたくしで

妾は康氏と申しましたが、息子を一人生んで一月もせぬうちに病気で身まかりました。この下の息子楊謝祖こそはその康氏の子でございます。それから二年も経たずに夫もこの世を去りました。亡き夫には遺言があり、わたくしがきちんと康氏の子の面倒を見るようにとのこと。以来十八年忘れたことはございません。この子をわたくしの子と同じように扱い、夫の言葉に背かないようにしてまいりました。どうして上の息子を兵役に出すかといえば、大きい息子はわたくし自身が生んだ子、陣中でもしものことがあっても下の子が私の葬式を出してくれましょう。（…）下の子が兵役に就いたとしたら、もしものことがあったとき、わたくしが康氏の子を死なせたことになります。わたくしが死んだあと、あの世で亡き夫に会わせる顔がありません。これこそがわたくしの本心です。お役人様、どうぞよろしくお汲みとりくださいますよう。（王脩然驚くしぐさでいう）婆さん、お立ちくだされ。そういうことならわしが間違っておった。「方寸の地にも香草は生える、辺鄙な村にも賢人はいる」とはよく言ったもの。おまえの言うとおり上の息子を兵役に就かせることにしよう。軍装の準備じゃ。

以上のように、王脩然は自分の非を認めて李氏を「賢人」として称え、李氏が推していた兄の興祖を連れて行くことに決める。こうして旅立つことになった興祖は妻に自分の刀を預けようとする。

（楊興祖做与旦児刀子科、云）大嫂、你近前来。我這把刀子、你兄弟数番家問我要、我不曾与他。今日我当軍去也、你若回家去時、就帯這把刀子与你兄弟去。（旦云）楊大、我問你咱。你与我這把刀子、奶奶知道麽。（楊興祖云）不知道。（旦云）小叔叔知道麽。（興祖云）也不知道。（旦云）楊大、你好粗魯也。你与我這把刀子、

奶奶不知、叔叔也不知、久已後俺兄弟帯出這把刀子来、則道春香抵盗了楊家的家私哩。

（楊興祖、妻の春香に刀を渡すしぐさをしていう）おまえ、こっちへおいで。わたしのこの刀は、おまえの弟が何度かほしいといっていたが今までやらなかったものだ。今日、軍に入ることになったから、もしおまえが実家に帰ることがあったら、この刀を持って行って弟にやるがいい。（春香いう）あなた、お尋ねしますが、この刀をわたしにくださることをお母様はご存じですか。（楊興祖いう）いや、知らないが。（春香いう）弟の謝祖さんはご存じですか。（興祖いう）あいつも知らないな。（春香いう）あなた、それはずいぶん粗忽ですよ。わたしにこの刀をくださっても、お母様がご存じなく、謝祖さんもご存じないなら、これから先わたしの弟がこの刀を身につけて出かけた場合、この春香が楊家の家財をくすねて渡したということになりかねません。

二人が何やら口論しているのを見とがめた王翛然はそのわけを問いただすが、説明を聞くと感心して、次のように言う。

（王翛然云）嗨、這小的又賢慧。春香、你将這把刀子来我看咱。好是把鑌鉄刀子。孩児、将的家去与兄弟帯。久已後便有些争競、到於官府中、你道僉軍的王翛然大人見来。這把刀子、久已後我与你做個大証見哩。

（王翛然いう）おお、この若い嫁も賢いことだ。春香、その刀をわしに見せてごらん。確かに鋼鉄の刀だ。おまえ、実家に持って行って弟に身につけさせるがよい。もしもあとで争いごとが起きたら役所に来て徴兵役の

王翛然さまが事情をご存じですと言いなさい。この刀についてはこれから先わしがおまえの証人になってやるからな。

ここで王春香は「賢慧」な若妻として印象づけられている。このあと李氏が王翛然に酒をふるまおうとすると、王翛然は、

老夫随処僉軍、水也不吃人的。你是個賢孝的人家、我便吃幾杯怕做甚麽。

わしがあちこちで徴兵を行うときには、水さえも他人のものは口にせぬのだが、おまえのところは賢孝の家であるから何杯か口にしても構うまい。

と、申し出を受け入れ、興祖も門出の酒を飲んで出発する。王翛然は、

楊興祖、你休煩恼、我与你一封書、見兀里不罕元帥、説你一家児賢孝的人家、必然抬挙你也。

楊興祖よ、心配する必要はない。わしが一通手紙を書いてやるから、兀里不罕元帥に会うがいい。おまえの家が賢孝の家だと言えば、きっとおまえを取りたててくれるだろう。

と、再び「賢孝」の家として楊家を高く評価する。この第一折のやりとりは伏線となってこのあとの展開において効果的にはたらき、本劇の構成を緊密で周到なものとしているのであるが、まずは先に進むことにしよう。

2　楔子（場所は楊家→林のはずれ）

あらすじ：楊興祖が出征して半年後、王春香の母の王婆婆は、衣服の洗い張りのため娘を里帰りさせてくれるように楊家に願い出ていたが、一箇月経っても帰ってこないので直々に迎えに行く。[4] 楊家の李氏は春香を里帰りさせるにあたって、謝祖に兄嫁を林のはずれまで送るよう命じる。言いつけどおりの場所で謝祖と別れ、一人で歩いていた春香の前に賽盧医[5]が現れ、妻が産気づいたので赤子を取り上げるよう春香に強要する（妻というのは実は推官[6]の家からさらってきた梅香（はしため））。春香が見に行くと梅香はすでに死んでいる。賽盧医は死体に春香の衣服を着せ、春香が持っていた刀で梅香の顔を傷つけてからその刀を死体の懐に入れ、一緒に来ないと殺すとおどして春香を連れて逃げる。

李氏は嫁の王春香を実母の要請に応じて里帰りさせるつもりであるが、農繁期で送っていく人がいない。春香自身は謝祖が送ってくれればいいというので李氏が頼むと、謝祖は躊躇して言う。

（楊謝祖云）別着個人送去也好。母親尋思波、嫂嫂年幼、哥哥又不在家、謝祖又年紀小、倘若有那知礼的、見親嫂嫂親叔叔、怕做甚麽。有那不知礼的、見一個年紀小的後生、跟着個年紀小的婦人、恐怕惹人笑話。（正旦云）児也、便好道順父母之言、呼為大孝。依着我的言語走一遭去。（楊謝祖云）母親的言語、不敢有違、您孩

児便送嫂嫂家去。（正旦云）你送到林浪嘴児辺、可便回来、叫嫂嫂自去。（楊謝祖云）理会的。

（楊謝祖いう）ほかの人に送ってもらうのがいいでしょう。母上、考えてもみてください。お姉さんは年若く、兄上は家を離れており、わたくしも若い。もしも礼をわきまえている人が、兄嫁と義理の弟を見かけるなら何も心配はあるまいが、礼をわきまえぬ者が、若い男が一人、若い婦人のあとについて歩いているのを見たら、物笑いの種にするやもしれません。（李氏いう）息子や、「父母の言に順うことを大孝と呼ぶ」と言うではありませんか。わたしのいうことを聞いて行ってきておくれ。（楊謝祖いう）母上の言葉に背くことはできません。ではわたくしが姉さんを送って行きましょう。（李氏いう）おまえは林のはずれあたりまで行ったらそこで引き返し、その先は姉さんに一人で行ってもらうのだよ。（楊謝祖いう）わかりました。

ここでは母親の願いに従うという意味での「孝」が強調されると同時に、若い男女が同行しているのを人に見られることへの懸念が表明されており、これもひとつの「賢」の表れと考えることができる。母も、人気のなくなる林の中には入らずに帰ってくるように注意を与えている。謝祖はいいつけを守って林のはずれで兄嫁と別れて帰るが、そのあと林の中に踏み入った春香にふりかかるのは思いも寄らない出来事であった。

林の中にいたのは男女の二人連れ、賽盧医と梅香である。登場しての賽盧医のせりふによると、医者として推官の家に行ったときに見かけた梅香をさらってきた。梅香は唖者であり、口がきけないので連れ回しても人に助けを求めることができないのを見越してさらってきたのであろう。登場詩でみずから「我是賽盧医、行止十分低（俺は賽盧医、品行は極めて下劣）」と述べるように、賽盧医は明確な悪人かつ悪役である。

梅香は今しも産気づいたところであり、ちょうどそこへやってきたのが春香であった。賽盧医は急いで春香を呼びとめて頼みごとをする。

（賽盧医云）大嫂、我有一個老婆、他要養娃娃。你是一般婦人家、煩你替我看一看。（旦児云）我那裏会做収生的老娘。（賽盧医怒科、云）你不肯麽。這裏無人、我便打殺了你。（旦児云）哥哥休鬧、我去看他便了。（看科）（旦慌科、云）哥哥、他不死了也。（賽盧医云）好好好。你身辺現帯着刀子哩。我活活的個人、他要養娃娃、你就一刀殺了他。便待干罷。你跟的我去、万事皆休、不跟的我去、我就奪這刀子殺了你。（旦云）哥哥是甚麽話。饒我性命。（賽盧医奪刀科）（旦背云）他如今行凶了、我婦人家怎対付的他。我且跟将去、一路上若有官府処、我可告他。楊興祖、則被你痛殺我也。罷罷罷、我跟将你去。（賽盧医云）待我剥下你的衣服、将来与梅香穿上、就着這把刀子、劃破他面皮、揣在懐裏。你休言語、跟着我走。

（賽盧医いう）奥さん、俺に女房がいて赤子を生むところだ。おまえも同じ女だから俺に代わってちょっと見てやってくれ。（春香いう）わたしにはとても産婆など務まりません。（賽盧医怒るしぐさでいう）いやだというなら、ここには誰もいないからおまえを殺しちまうぞ。（春香いう）お兄さん、落ち着いてください。見ればよいのですね。（見るしぐさ）（春香慌てていう）お兄さん、奥さんは亡くなっておられるのではありませんか。（賽盧医いう）そうかそうか。おまえは刀を身につけているな。元気だった俺の女房が赤子を生もうとしていたのに、おまえが刀で殺したな。このままで済むわけはないな。おまえが俺と一緒に来るならそれでよいが、俺と一緒に来ないならその刀を奪っておまえを殺すぞ。（春香いう）お兄さん、何をおっしゃるのです。

命ばかりはお助けください。（賽盧医、刀を奪うしぐさ）（春香背を向けていう）この男が今かかってきたら女のわたしにはたちうちできません。ひとまず一緒に行くことにして、途中のどこかに役所があれば訴えることにしましょう。興祖さん、あなたを思うとせつないけれど、えい、仕方がない、一緒に行きましょう。（賽盧医いう）それならおまえの服を脱がせて下女に着せ、この刀で下女の顔に傷をつけてからその懐に突っ込んでおこう。文句を言わずに俺について来い。

こうして春香は、殺されることは免れたが、賽盧医に連れ去られてしまう。傍白から再び春香の思慮深さが窺われるが、賽盧医は死者の身元をごまかすために梅香の死体に春香の服を着せ、春香が弟に与えるために持っていた例の刀もここに残されてしまう。

3　第二折（場所は楊家→林のはずれ）

あらすじ：半月後、王婆婆が楊家にやってきて、春香が実家に帰っていないことが判明する。王婆婆は送っていったという楊謝祖を疑いつつ、李氏や謝祖とともに春香を探しに行く。三人は牛飼いに教えられて林の中に女の死体を見つける。春香の母が通りがかった役人（推官の鞏得中）に訴え出ると、下役の令史が事情を聴く。李氏は死体の衣服は春香のものだが死体は春香ではないと主張して、火葬を承諾しない。

楔子の一件があってから半月後、李氏は春香が実家に帰ったものと信じているので、半月ほど何の音沙汰もないことを不審に思っていると、そこへ王婆婆がやってくる。ちぐはぐした会話ののち、春香が行方不明になっている

ことがわかる。謝祖が送って行ったと知ると、王婆婆は謝祖が兄嫁にちょっかいを出して拒まれた末に殺したと決めつけ、死体が見つかると、変わり果てた姿であるにもかかわらずそれが娘であると言い張って謝祖を犯人として訴えようとする。すると、ちょうどそこに鞏得中という推官が下役たちと通りかかる。推官が「一来下郷勧農、二来不見了個梅香、我如今就去尋一尋」（一つには村里を視察して農事を奨励し、二つには梅香がいなくなったので、これから探しに行こうというわけだ）と述べることからわかるように、いなくなった梅香とは賽盧医が連れていた梅香である。王婆婆が「好冤屈也（やりきれないこの思い（の訴え）をお聞きください）[7]」と呼びとめると、役人たちも死体を確認して聴取が始まる。春香の実の母親が娘の死体にちがいないと主張するのに対して、李氏は頑として認めない。

（令史云）兀那婆子、這屍首是麽。（正旦云）這衣服是、屍首不是俺媳婦児的。（令史云）怎麽這衣服是、屍首不是。你説我試聴咱。（正旦唱）

【倘秀才】被鴉鵲啄破面門、狼狗咬断脚跟、到底是自己孩児看的親。（…）

【叨叨令】這関天的人命事要您個官司問、又不曾経検験怎着我屍親認。現如今雨淋漓正値着暑月分、那屍骸全毀爛都是些蛆螬糞。我其実認不的也波哥、我其実認不的也波哥、怎与他那従前模様渾別尽。

（令史いう）こら婆さん、この死体は春香のものか。（李氏いう）この衣服はそうですが、死体は嫁のものではありません。（令史云）どうしてこの衣服はそうで、死体はちがうのか。話すなら聴いてやろう。

（李氏うた）カラスやカササギに顔をついばまれ、オオカミやイヌに足をかじられていようと、結局自分の子

なら見ればわかります。（…）

（うた）人の命に関わるこの重大事、お役所でよくお調べください。検屍もせずにどうして親族のわたしを納得させられましょう。今は雨が降りつづきちょうど暑い季節、その死骸はすっかり腐って蛆虫の糞まみれ。わたしはとても認めることはできません、わたしはとても認めることはできません、どうして生前のあの姿からこれほど変り果てるものか。

死体は損傷が激しいが、春香の生前の姿とあまりにちがうので李氏はそれと認めない。実母のほうが春香であると言い張るのは奇妙ともいえるが、娘が行方不明になり、娘の衣服を着た死体が目の前にあれば、そのように思い込むのも無理はないかもしれない。二人の母親を対比することによって、結果的に李氏の賢明さを浮き彫りにしているともいえよう。しかし形勢は楊家の親子に不利になってくる。春香が携えていた刀が見つかるからである。

（楊謝祖拿刀子科、云）母親、兀的不是我哥哥的刀子。（正旦云）児也、休覷他。（令史云）相公、你見麽、屍首旁辺放着一把刀子、這小厮看見、就害慌了也、眼見的是這小厮欺兄殺嫂。兀那婆子、這刀子是您家的麽。（孤云）将来我看。倒好把刀子、総承我罷、好去切梨児吃。（正旦云）這把刀子是、衣服是、屍首不是俺媳婦児的。

（楊謝祖、刀を手に取るしぐさでいう）母上、これは兄上の刀ではありませんか。（李氏いう）息子よ、見てはいけない。（令史いう）ほら、推官どの、死体のそばに刀が一つ落ちています。こいつはそれを見るなり慌てだしました。明らかにこいつが兄を裏切って兄嫁を殺したんだ。これ婆さん、この刀はおまえさんの家のか。

（推官いう）持ってきてわしに見せてくれ。これはよい刀じゃ。わしにおくれ、梨を切って食べよう。[8]（李氏いう）この刀は嫁のもの、衣服も嫁のものですが、死体は嫁ではありません。

刀が見つかっても李氏は譲らず、検屍をするべきだと主張する。しかし令史は、今は六月で天候によって損傷が進んでいるので検屍はできないとして早く火葬しようとする。[9]

（令史云）噤声。這婆子好無理也。我是把法的人、倒要你教我這等這等検屍。你也曉的、春正夏四、秋九冬十、纔是検屍的時分。如今正是六月天道、雨水也下了幾陣、暑気蒸、蛆虫鑽、筋骨凋零、眉目難分、爪髪解脱、難以検覆。張千、你去城裏喚一個巧筆丹青来、依着這屍首画一個図本、着這婆子画一個字、領将這屍首去焼毀了、依着這屍傷図本打官司。便与我焼了這屍首者。

（令史いう）言葉を慎め。この婆さんは本当に物分りが悪い。わしは法を司る者だというのに、おまえの分際でどうしてもわしに検屍をしろと言うのか。知ってのとおり、春は正月、夏は四月、秋は九月に冬は十月、検屍をするのはこの時期だけじゃ。今はちょうど六月の天気、雨も何度か降り、蒸し暑く、蛆がたかって、身体は朽ち果て顔の見分けもつかず、爪や髪も抜け落ちて検分しがたい。張千、おまえは街へ行って腕のいい絵かきを呼んでこい。この死体を絵に描いてこの婆さんに画き判をもらい、遺体は運んで行って火葬にし、遺体の傷の絵を元にして訴訟を行うぞ。わしに代わってこの遺体を火葬にしろ。

令史は嘘をついて検屍を拒み、[10]とにかく早く決着をつけようとするが、李氏は「燒不的」（火葬することはできません）というせりふを繰り返し、どうしても火葬を承知しない。王婆婆のほうは、通りがかった役人たちに最初に訴えかけたあとは全くせりふがない。日が暮れてきたため、取り調べのつづきは役所で行うことになる。

4　第三折（場所は開封府）

あらすじ：役所で李氏が息子は犯人ではないと言い張るので、令史は謝祖を拷問する。李氏は無実を訴えるが聞き入れられず、令史はうやむやのうちに謝祖が自白したことにして枷を付けて牢屋に入れる。

この折に登場するのは李氏と楊謝祖のほかは役人たちのみである。令史はまたしても李氏に遺体が春香であると認めさせようと躍起になる。母と息子が一緒にいると本当のことを言わないと考え、二人を引き離して謝祖を拷問し、李氏には謝祖が自白したと嘘をついて諦めさせようとするのである。

（令史云）兀那婆子、招状是実了也、怎生饒也。（正旦叫冤科、唱）（…）

（令史云）兀那老婆子、你是個郷里村婦、省的甚麼法度。（正旦唱）

【耍孩児】你休小覷我這無主的窮村婦、有句話実情拝復。俺孩児従小裏教習儒、他端的有温良恭倹誰如。俺孩児行一歩必達周公礼、発一語須談孔聖書。俺孩児不比塵俗物、怎做那欺兄罪犯、殺嫂的凶徒。

（令史云）這小厮又不曾打他、他自招了来。（正旦云）都似你這般打来、怕不招了。只是招是招、人心不服。

（令史いう）おい婆さん、自白したなら確かだろう、どうして許すことができようぞ。（李氏ぬれぎぬと叫ぶしぐさ、うたう）（…）

（令史いう）こら婆さん、おまえのような村婦（いなかもの）には法律のことはわからぬのじゃ。

（李氏うた）どうかこの夫を亡くした貧しい村婦を見くびらないでください。ありのままの思いをお答えしましょう。わたしの息子は幼いころより儒教をおさめ、まさしく温良恭倹なことでは誰にも負けません。わたしの息子は一歩あるくにも必ず周公の礼にのっとり、一語発すれば孔子の書を語ります。わたしの息子は俗物とは比べものになりません。どうして兄を裏切って罪を犯し兄嫁を殺すような凶悪なことをするものか。

（令史いう）打ったわけではないのにみずから自白したのだぞ。（李氏いう）そうやって打てば自白もするでしょうが、たとえ自白したとしても人の心は納得しません。

このあと李氏はうたでも役所の対応を批判するが、訴訟は進展を見せず、謝祖は枷をつけられて死刑囚の牢獄に収容される。役人たちは、証拠の品があり、謝祖もうやむやのうちに自白したのだから、[11]この一件は落着したとほくそえむ。

5　第四折（場所は賽盧医の家のあたり→開封府）

あらすじ：王春香は賽盧医に身を任せるのを拒みつづけ、毎日打たれながらこきつかわれている。ある日井戸で水を汲もうとしていると、手柄を立てて家に帰る途中の楊興祖が通りかかる。二人はお互いを認め、春香は夫に経緯を話す。一方、開封府では審囚刷巻（囚人改めと文書改め）にやってきた王脩然が楊謝祖の無実の

訴えに耳を傾けて審理に疑問をいだいていたところである。令史らがなんとか不備をとりつくろおうとしていると興祖が春香と賽盧医を連れて現れ、すべてが明らかになる。王翛然は楊家の母・子・嫁を顕彰し、宴席を設ける。

さて、いよいよ最終折である。まず、王春香と楊興祖とのいささか偶然すぎる再会があり、二人は賽盧医を連れて開封府に向かう。

その次の場面は王翛然の登場から始まる。

（王翛然領張千李万上）（王翛然詩云）王法条条誅濫官、為官清正万民安。民間若有冤情事、請把勢剣金牌仔細看。老夫大興府尹王翛然。自僉軍回来、累加官職、賜与我勢剣金牌、先斬後奏。専一体察濫官汚吏、採訪孝子順孫。今日来到這河南府審囚刷卷。

（王翛然、張千と李万を連れて登場）（王翛然、詩にいう）国法は秩序正しく悪い官吏を罰し、役人が清く正しくあってこそ万民は安らかに暮らせる。民のあいだにもし冤罪事件があれば、勢剣金牌を手にして仔細に調べよう。わしは大興府尹の王翛然じゃ。徴兵から帰ると重ねて官職を賜り、勢剣金牌を与えられて先斬後奏を許された。不埒な役人どもを摘発し、孝子順孫を探し求めることに専念しておる。今日はこの河南府で囚人と判決文書の取り調べを行うぞ。

実は、かねてより王翛然が楊家を「賢孝」の家として郎主に奏上していた結果、楊家は郎主から顕彰されることになり、このとき王は楊家にその報をもたらす任務も帯びていた。ただ、審囚刷巻は国家の大事であるのでそちらを先に済ませることにしたのである。令史に文書を持ってこさせて調べると、楊謝祖の案件である。令史は証拠の品もあって問題ないと服と刀を見せる。刀に見覚えがある王翛然が謝祖を連れてこさせると、果たして顕彰することになっている楊家の次男である。自分の評価がまちがっていたのかと疑いつつも王翛然は、口をはさんで邪魔をする令史を黙らせてみずから話を聞く。謝祖はこれまでの経緯や役所の拷問について述べ、己の無実を訴える。

謝祖の言葉や様子に心を動かされた王翛然は、令史に「准伏」はあるのかと尋ねる。准伏とは、犯人の親族が当人の犯罪と認めて画き判を記した文書で、これがないと罪を確定できないのである。令史は慌て始め、李万に対して、楊謝祖の母親を見つけ、うまくだまして画き判をもらってくるよう命じる。早く結着をつけてしまおうというわけであるが、李万はこの命令に従わない。そこで張千に頼むと張千は引き受けるが、それを知った李万に阻止される。張千・李万は呼称からもわかるように共に役所の下役であるが、本劇では張千は私欲のために令史のいいなりになる小人物、李万は善悪をわきまえて令史の命令も断る賢明な人物として対照的な性格を見せる。[12]

そして、いよいよ終盤である。李万のおかげで画き判を記さずに済んだ李氏は役所に出向いて王翛然に息子の無実を訴える。

（叫屈科）（王翛然云）怎生冤屈。（正旦云）外郎不曾検屍、又不曾招呼屍親。（王翛然云）令史、他説你不曾検屍、又不曾招呼屍親哩。（令史云）小人招呼屍親、識認的明白了也。（正旦云）你招呼那家屍親来。（令史云）我招呼那死的爺娘家屍親、認識的明白了也。（正旦云）他爺娘家是屍親、俺公婆家不是屍親。不争俺這孩児与

他償了命、倘若拿住那殺人賊呵、可着誰償俺孩児的命。大人、可与俺這孤児寡婦做主咱。俺是這郷裏的婆子、不会打您這城中的官司。（王翛然云）似這等呵、着老夫怎生下断。（楊興祖同旦児上、云）大嫂、你則在衙門首住者、我見大人去。

（［李氏］無実を叫ぶしぐさ）（王翛然いう）どのような冤罪じゃ。（李氏いう）令史どのは検屍もせず、死人の家族を呼ぶこともありません。（令史いう）わしは死人の家族を呼んだし、はっきり認めたぞ。（李氏いう）どこの家の家族を呼ばれましたか。（令史いう）わしがあの死人の実家の家族を呼んだら、はっきり認めたのだ。（李氏いう）実家は家族でしゅうとめのわたしは家族ではないのですか。もしもわたしのこの子が命を償い、かりにその殺人犯が捕まったなら、だれがわが子の命を償ってくれるでしょう。お役人さま、どうかわれわれ孤児と寡婦の力になってくださいまし。わたくしは村里の年寄り、このような街のお役所に訴えを起こすことには不慣れです。（王翛然いう）そういうことだとすると、どのように裁きをつけようものか。（楊興祖、春香とともに登場していう）春香、おまえは役所の門のところで待っていてくれ。お役人に会ってくる。

役所に入っていった楊興祖が王翛然に対面し、戦場で手柄をたてた報告をしたあと、王翛然に言われてふと見ると母親がいる。

（楊興祖云）兀的不是母親。（正旦云）兀的不是楊大児也。則被你痛殺我也。（王翛然云）楊興祖、兀那個帯枷的人、你再看咱。（楊興祖云）兀的不是兄弟。（楊謝祖云）哎喲、哥也、苦痛殺我也。（王翛然云）兀那楊興祖、

他是你的讐人哩。（楊興祖云）大人、這是我的親兄弟、怎做的讐人。（王翛然云）你当軍去、他殺了你媳婦児春香也。（楊興祖云）大人可憐見、春香現有哩。（王翛然云）春香在那裏。快喚将来。（旦児做見正旦悲科、云）母親也、則被你痛殺我也。（正旦云）孩児也、你在那裏来。険些児不送了楊謝祖的性命。則被你想殺我也。（楊興祖云）母親、被一個賊漢賽盧医、将春香拐帯去了。您孩児連那賊漢也拿将来了也。

（楊興祖いう）これは母上ではありませんか。（李氏いう）興祖ではないか。おまえを思ってつらかったよ。（王翛然いう）楊興祖よ、あの枷をはめた人も見てごらん。（楊興祖いう）弟ではないか。（楊謝祖いう）ああ兄さん、つらいことです。（王翛然いう）楊興祖よ、やつはおまえのかたきじゃ。（楊興祖いう）お役人さま、これはわたしの実の弟、どうしてかたきでありましょう。（王翛然いう）おまえが軍に入ったあと、やつはおまえの嫁の春香を殺したのじゃ。（楊興祖いう）お役人さま、お言葉ですが春香は生きております。（王翛然いう）春香はどこじゃ。早く呼んでこい。（春香、李氏に対面し嘆くしぐさでいう）お母様、ずっとお母様を思ってつらかった。（李氏いう）春香、おまえはどこにいたのです。もう少しで楊謝祖の命がなくなるところでした。ずっとおまえを思っていたよ。（楊興祖いう）母上、春香は賽盧医という悪者にさらわれていたのです。わたくしはその悪者も連れてまいりました。

こうして最後にすべてが明らかになる。賽盧医は梅香をさらったことも春香を無理やり女房にしようとしたこともあっさり認めて許しを乞うが、聞き入れられはしない。王翛然は、次のように各人への賞罰を言い渡す。

（王翛然云）一行人聴我下断。本処官吏刑名違錯、杖一百、永不叙用。賽盧医強奪妻女、市曹中明正典刑。王氏妄告不実、杖断八十。（旦児云）告大人、母親年老、春香替杖。（王翛然云）這媳婦直恁般賢孝。姑看春香面、罰銅折贖。有罪的断遣分明。您一家児聴老夫加官賜賞。楊興祖、為你替弟当軍、拿賊救婦、加為帳前指揮使。春香、為你身遭擄掠、不順他人、可為賢徳夫人。楊謝祖、為你奉母之命、送嫂還家、不幸遭逢人命官司、絶口不発怨言、可称孝子、加為翰林学士。兀那婆婆、為你着親生子辺塞当軍、着前家児在家習儒、甘心受苦、不認人屍、可称賢母、加為義烈太夫人。

（王翛然いう）皆わしの判決を聴け。本署の官吏は誤った裁判を行ったため、杖刑百回に処して永久に罷免する。賽盧医は妻女を強奪したため、刑場にて法に則って極刑に処する。王氏は事実に反するでたらめを述べたため、杖刑八十回。（春香いう）お役人さまに申し上げます。母は老齢ですのでこの春香が代わりに杖刑を受けます。（王翛然いう）この嫁はまったく賢孝なことだ。ここはひとつ春香の顔を立てて罰金に換えて償わせよう。これで罪ある者についての判決は明らかになった。次におまえたち一家にはわしが官職を加え褒賞を与えるぞ。楊興祖、おまえは弟に代わって軍に入り、賊を捕らえて妻を救ったことにより、帳前指揮使とする。春香、おまえは略奪に遭いながらも身を任せなかったことにより、賢徳夫人の封号を与えよう。楊謝祖、おまえは母親の命に従い、里帰りする兄嫁を送っていき、不幸にして訴えられたが決して怨み言を言うこともなく、まことに孝子と称すべきことにより、翰林学士としよう。そして婆さんよ、おまえは実の息子を辺塞の軍に入れて前妻の子には家で学問をさせ、甘んじて苦しみに耐えて他人の死体を嫁と認めることなく、まことに賢母と称すべきことにより、義烈太夫人の封号を与えよう。

楊家の一同は感謝の念を述べ、王翛然はこの開封府の役所で祝宴を開くことにして劇は終わる。

二　「救孝子」の構造

前節で見たように、本劇は第一折で示された楊家の人々の「賢孝」という真実が虚偽によって脅かされ、見失われそうになったのち、第四折で再び回復されるという構造になっている。劇中で起こっていることを余すところなく知らされる観客／読者には予定調和的ともいえる展開であるが、劇中の人物たちは限られた経験と知識しか持っていない。楔子で起こった出来事は、当事者である王春香と賽盧医以外の者にとっては起こったことさえわからない。したがって、楊家では実家に帰った春香がなかなか帰ってこないうえに音沙汰もないと不審に思い、実家の王婆婆はいつまで経っても楊家が嫁を里帰りさせてくれないと不満に思っている。しかし、実際には春香はそのどちらにもいない。姿を消してから半月後にやっと、姿を消していたということが判明し、そのあとも第四折まで生死も含めて行方はわからない。つまり、春香とともに真実も行方不明になるのである。

そのような状況の中、第二折で死体が見つかる。しかもそれは春香の衣服と春香が携えていた刀とともに発見される。賽盧医の偽装によってもたらされた最初の虚偽である。春香の実家の母は死体が春香であると判断して、すぐさま謝祖を犯人とする殺人事件を作り上げてしまう。こうして第二の虚偽が生まれる。そのようなことはありえないと信じる李氏は役人に対して検屍を行うように強く主張するが、いい加減な役人たちには聞き入れず、謝祖を拷問して自白させようとする。これを第三の虚偽といってもよいであろう。

本劇では、李氏と楊謝祖の二人が楔子を含むすべての折に登場する。この二人には、春香の身に何が起こったのかは不明であるが、謝祖が殺していないという真実は明らかである。しかしそれを知っているのは二人だけなのである。第一折で強調された「賢孝」なる家族としての楊家のイメージも、その場に登場していなかった人物たちの前では通用しない。第二折以降、正旦である李氏の曲詞は、裁判が不当であり息子は無罪であるのに誰にも理解されない苦しみを繰り返し表現している。

いくつもの虚偽によっておおわれていた真実は、第四折で徐々に明らかになる。まずは楊家の人々の人柄を知り、裁判を正す役目を帯びた王脩然である。王脩然は裁判の不備を指摘して謝祖に話を聴き直す。そこにやってくるのが兄の興祖、生きていた春香、連れ去った犯人の賽盧医。こうして真相は一気に白日の下にさらされるのである。

それにしても、もし賽盧医が梅香の死後、春香を連れて逃げただけであったなら、死体が誤認されることもなかっただろう。春香の衣服と刀をその場に残すという賽盧医の偽装が、死体はいなくなった春香かもしれないという可能性を作り出したのである。この可能性を否定するためには、結局本人が生きて登場するのを待つしかない。梅香の死体が春香の衣服におおわれることは、真実がおおい隠されることであった。

三　反転される構造――「殺狗勧夫」

「救孝子」を王脩然が判決を下すもう一つの劇である「殺狗勧夫」と比較するために、次に「殺狗勧夫」のあらすじを示そう。[13] 本劇については、まずは繁を避けて引用を省き、ストーリーの概略のみを示すことにする。歌唱者

は全篇を通して正末の孫華である。

1　楔子（場所は孫栄の家）

裕福な孫栄は実の弟である孫華を邪険にして城南の破瓦窯に住まわせ、柳隆卿・胡子転という二人のごろつきと義兄弟の契りを結んで仲良くつきあっている。[14] 楊氏（孫栄の妻）はそのことを嘆く。柳と胡は孫栄の誕生日に水で薄めた酒を持っていき、わざと瓶を倒してごまかし、孫家の酒食をたかる。[15] 孫華も祝いにやってくるが、貧しくて手ぶらであったため、兄に罵られ打たれて帰る。

2　第一折（場所は孫家の墓）

翌日は清明節である。孫栄は柳隆卿・胡子転とともに祖先の墓参りに行く。孫華も恐る恐るやってくるが、兄はごろつき二人と酒盛りをしていて仲間に入れてもらえない。外から墓を拝んでいると、柳・胡は孫華が兄を呪っていると孫栄に嘘の告げ口をし、またしても兄に打たれる。孫華は父母が生きていてくれたらこんな仕打ちを受けることもなかっただろうと嘆き悲しむ。

3　第二折（場所は謝家楼→孫栄の家）

孫栄は次の日も謝家楼でごろつき二人と酒盛りをしたあと、酔っぱらって道で寝てしまう。大雪の降る中、二人は孫栄を置き去りにするのみならず、孫栄の靴に入っていた紙幣を盗む。[16] 同じ道を孫華が通りがかり、何かにつまずいたと思うと泥酔した兄である。孫華は柳・胡二人の身勝手さにあきれつつ、兄が凍死しないよう

に背負って家まで送り届ける。楊氏は感謝して麺を供す。目を醒ました孫栄は靴に入れておいた紙幣がないのに気づき、弟が盗んだと決めつけて雪の中に跪かせる。孫華はつらい思いを兄嫁に訴えて帰る。翌日、柳・胡の二人がやってきて、孫栄を背負ってきたのは自分たちで、家の前で孫華に引き渡したのだと言う。孫栄はたやすく言いくるめられ、また三人で李家楼へ飲みに出かける。楊氏は一計を案じて夫の目を開かせることにする。

4

第三折（場所は王婆婆の家→孫栄の家→柳の家→胡の家→孫華の家→河原→孫栄の家）

楊氏は隣家の王婆婆に犬を譲ってもらい、頭と尾を切り落として人の衣服と帽子[17]を被せて裏の戸口の前に置く。孫栄は酔って帰宅し血まみれの死体を見つけて慌てふためく。楊氏は、いつも面倒をみている義兄弟の二人に頼んで死体を遠くへ運んでもらえばいいと提案し、孫栄と一緒に頼みに行くが二人に連続して断られる。楊氏はこうなったら弟に頼むしかないだろうと言い、孫栄もさすがにこれまでの自らの仕打ちを考えて躊躇しつつ破窯に孫華を訪ねる。[18]孫華に合わせる顔がない孫栄に代わってまず楊氏が声をかけ、次いで孫栄が事情を話してこれまでのふるまいを詫びる。孫華は少し嫌味を言って兄を困らせたあと、頼まれたとおりに死体を背負って行って河原に埋める。

5

第四折（場所は孫栄の家→開封府）

孫華は兄に質屋の店を任されている。そこへ柳・胡の二人がやってきて、相手にされなくなった腹いせに孫栄を殺人の罪で役所に訴えることにする。開封府尹の王脩然が登場して原告・被告から話を聞く。[19]原告のごろ

つきは、孫栄が酔いに任せて人を殺してその始末を自分たちに頼んだと主張する。かたや孫栄は、家に帰ってきたら門の前に誰かに殺された死体があったのだと述べる。孫華は王脩然に対し、柳・胡の日ごろの行いを暴露して、二人を信用しないようにと告げる。王が孫栄に自白させようとして部下に拷問を命じると、孫華が犯人は自分であると名乗り出る。そこへ楊氏が登場し、すべては自分の仕組んだことであると、これまでの経緯を説明する。証拠となる犬の死体が掘り出され、王脩然によって判決が下される。柳・胡の二人は罰を受け、孫栄は賢妻によって罰を免じられる。楊氏は旌門を立てて顕彰し、孫華は県令に任ぜられる。

前半（第二折まで）に繰り返されるのは、孫栄が柳隆卿・胡子転の虚偽の言動にだまされて気前よく二人に飲食をふるまい、真心ある実弟の孫華に何かと難癖をつけて虐待する場面である。孫栄の妻楊氏は夫の過ちを見抜いてやきもきしており、何度も夫を諭すのだが一向に功を奏さない。柳隆卿・胡子転の行う悪事を列挙してみよう。

① 孫栄の誕生日祝いに水で薄めた酒を持っていってわざと倒してごまかし、結局孫栄が出した酒を飲む。
② 孫華がやってくると贈り物は持ってこないのかと嫌味を言う（以上、楔子）。
③ 清明節の墓参で酒を飲み、あとから孫華が来ると罵倒する。
④ 孫華が孫栄を罵ったと嘘をついて孫栄の怒りをあおる。
⑤ 孫華が遠くから先祖を祭っていると、早く兄が死んで財産がころがりこむように兄を呪っていると嘘をつく（以上、第一折）。
⑥ 酒宴のあと雪の中に孫栄を置き去りにして帰る。

⑦　孫栄の靴の中の紙幣を盗む。
⑧　翌日、孫栄の家に来て、楊氏に孫栄を背負って家の前まで送り届けたのは自分たちであると嘘をつく（以上、第二折）。

二人は自分たちの利益しか考えていないのだが、孫栄はまんまと口車に乗せられ、孫華に対してひどい仕打ちをする。上記の番号に対応させて列挙すれば、誕生日に贈り物を持たずにご馳走にありつきに来たと怒っては打ち（②）、清明の墓参では柳・胡とともに罵倒し（③）、二人の嘘を信じて打ち、先祖の墓にも近寄らせない（④）。兄を呪っていると聞くと激怒してさらに打擲する（⑤）。孫華が盗みをはたらいたと決めつけて雪の中に跪かせるのは孫栄自身の判断だが、二人の嘘（⑧）によってその判断は補強されることになる。家の前で孫華に引き渡したことにすれば、そのあとで孫華が紙幣を盗んだと考えられるからである。

以上のように本劇では冒頭から虚偽・虚飾にまみれた交際が繰りひろげられる。観客／読者にはそれが真の友情からほど遠いものであることがはっきりとわかるが、孫栄には真実が見えていない。劇中でこの真実に気づいているのは孫華と楊氏のみである。正末である孫華は曲詞において兄のひどいしうちを嘆き、やりきれぬ思いを吐露するが、行動を起こして事態を変えようとはしない。楊氏は孫栄を諭すこともあるが理解してもらえない。孫栄がいかに虚偽に惑わされ混迷の中にあるかを強く印象づけるのが本劇の前半である。

このようなことが繰り返されるばかりではごろつきに財産を食いつぶされてしまう。そこで真実を明らかにするために楊氏が考えついたのが「殺狗」の計略である。すなわち、孫華に本当に難が降りかかったとき、柳・胡がどのようなふるまいをするかを試すことで夫の目を醒まさせようというわけである。以下、後半では、裁判の場面も

含めてこの計略の顛末が繰りひろげられることになる。

家の前に死体を見つけておびえる孫栄に楊氏は次のように言う。

（旦云）員外、你不要慌、則咱両口児知道。你有那両個兄弟、平日喫的穿的都是你的、与你結做死生交、対天盟誓。兄弟有難哥哥救、哥哥有難兄弟救。今日你有難、正用的着他。如今悄悄的教両個兄弟、将死屍背出丟在別処（第三折）。

（楊氏いう）おまえさん、慌てることはありません。これはわたしたち二人しか知らぬこと。おまえさんにはあの二人の兄弟がいて、日ごろ食べるのも着るのもすべておまえさんのお蔭、ともに死生の契りを交わし、天に誓いを立てた仲。弟が困ったときは兄が助け、兄が困ったときは弟が助けるのでしょう。今おまえさんに困ったことが起きたのだから役に立ってもらいましょう。これから二人の弟に頼んでこっそり死体を別の場所に運んで捨ててもらうのです。

しかし、というより楊氏の思惑どおり、二人には次々にこの頼みを断られてしまう。そして最後の頼りである孫華を訪れるのだが、さすがに孫栄も気が引けて尻込みをし、楊氏が事情を説明する。

（正末云）嫂嫂、你的話只怕不准。果有這等事、我哥哥怎不説一句来。（旦云）員外、你説与兄弟、怕甚麼。（孫大云）大嫂、我説呵、恐怕兄弟変了臉。（旦云）你兄弟不是那等人。（孫大云）兄弟、你哥哥昨日喫酒回来、至

後門前、不知是誰殺了一個人。也曾叫那柳隆卿、胡子転両個賊子去、他都不肯来背。兄弟也、你想着与我是共乳同胞的情分、你不救我時、教誰救。（正末云）哥哥、這人命的事。你是好人家的孩児、怎麽到的官府中問理去。那両個逆子、你養育了他、喫的穿的、那一些児不是你的。你今日有難不肯救、你卻教我来背。好也囉、咱両個見官去来。（旦云）小叔叔、你看我些面皮咱。（孫大云）這都是你哥哥的不是了也。兄弟、你息怒咱（第三折）。

（孫華いう）姉さん、お話がおかしいですね。本当にそういうことがあったのなら、兄さんはなぜ一言も話さないのでしょう。（楊氏いう）おまえさん、弟さんに話してごらん、何も心配はいりませんよ。（孫栄いう）だがおまえ、おれが話せば弟は気が変わるだろう。（楊氏いう）弟さんはそんな人ではありません。（孫栄いう）実はな、兄さんが昨日酒を飲んで帰ってくると裏門の前で人が誰かに殺されていたんだ。そこで柳隆卿・胡子転の二人に頼みに行ったがあの悪党どもは（死体を）運んでくれないのだ。弟よ、どうか同じ乳を飲んだ兄弟の仲と思ってくれ。おまえが助けてくれなければ誰が助けてくれようか。（孫華いう）兄さん、これは人の命に関わること。坊っちゃん育ちの兄さんがどうしてお役所の取り調べなど受けられよう。あの二人のならず者は兄さんが面倒を見てやって、食うもの着るもの一つとして兄さんからもらわないものはない。それなのに今困っていても助けようとせず、兄さんはわたしに死体を運べと言うのですか。そういうことなら二人でお役人のところへ行きましょう。（楊氏いう）弟御、どうかわたしの顔に免じてくださいな。（孫栄いう）これまでのことはすべて兄さんが悪かった。弟よ、どうか怒りを静めてくれ。

ようやく孫栄も自分がまちがっていたことに気づく。楊氏の計略はみごと成功したのである。孫華はこれまでの兄の仕打ちに対してひとしきり憤懣を述べたあとで、兄夫婦の頼みを聞きいれて河原まで死体を運んでいき、裁判沙汰になった日には自分が代わって裁かれようとまで述べる。このあと終盤の展開は第四折のあらすじのとおりである。

楊氏の計略で用いられるのがなぜ犬でなければならなかったのかという疑問も最後に楊氏によって説明される。

（旦云）相公、従来人命関天関地、豈可没個屍親来告、要這両個光棍与他索命。（…）妾身毎毎勧他、只是不省。妾身曾発一個大願、要得孫大与孫二両個相和了時、許焼十年夜香。偶然這一晩焼香中間、看見一隻犬打香桌跟前過来。妾身問知此犬是隔壁王婆家的、妾身就他家裏、与了五百個銭買将来。到家将此犬剁了頭尾、穿了人衣帽、撇在後門首（第四折）。

（楊氏いう）お役人様、もとより人の命は天地にかかわる大事、どうして死者の親族からの届け出もなしにこの二人の与太者にこの人の命を奪わせてよいものでしょうか。（…）わたくしはいつも夫をいさめましたが聞き入れられません。そこで一つ大願をかけて、孫栄と孫華の二人が仲よくなるように夜香を十年焚くことにいたしました。ある夜、たまたま香を焚いておりますときに一匹の犬が香机の前を通りました。わたくしはこの犬が隣の王ばあさんの家の犬であることをつきとめると、訪ねていって五百銭で犬を買い取りました。そして家に戻るとこの犬の頭と尾を切り、人の衣服と帽子をかぶせて裏門のところに置いたのです。

願をかけて祈っているときに通りかかった隣家の犬。それだけのことでこの計略を思いつくというのは唐突ではあるが、願をかける賢婦に動かされた神の導きであると考えれば不思議はないかもしれない。このあと犬の死体が確たる証拠となり、人物たちは王翛然から自らの賢愚・善悪に応じた裁きを受けるのである。

楊氏の計略は犬の死体を人に見せかけてだますことであり、紛れもなく一つの虚偽である。しかし、虚偽にだまされている人に真実を知らせるためには、もう一つの虚偽が必要であった。本劇の場合には、真実は虚偽によって明らかになるのである。

さて、ここで二作品の制作時期について検討しよう。「救孝子」は、『録鬼簿』巻上の「前輩已死名公才人、有所編伝奇行於世者」に王仲文（大都の人）の作として記載されている。また、本劇は『太和正音譜』（題を「不認屍」とする）や『元曲選』[20]でも王仲文の作と記されている。孫楷第の考証によれば、王仲文は金末の進士で、金ののち元に仕えたという。「救孝子」と類似のストーリーをもつ劇は南戯にも存在したらしい。『永楽大典』目録巻三十七にある「何推官錯認屍」や徐渭『南詞叙録』「宋元旧篇」のリストにある「何推官錯勘屍」がそれである。[21]

一方「殺狗勧夫」は、『録鬼簿』巻下の「方今才人相知者、紀其姓名行実並所編」に蕭徳祥（杭州の人。医者）の作として「王翛断殺狗勧夫」が挙げられている。ただし、略伝には「又有南曲戯文等」と記載され、続く作品名の中には「小孫屠」（永楽大典戯文三種の一つと同じ題）や「包待制三勘蝴蝶夢」（関漢卿の作と同じ題）も見られるため、この「王翛断殺狗勧夫」が果たして本稿が論じている「殺狗勧夫」であるかどうかについては疑問が残る。[22]また本劇の脈望館抄本では、冒頭の題（「断殺狗勧夫」）の下には「元　無名氏」と記され、末尾の題目正名「楊氏女勧弟兄和睦　王翛然断殺狗勧夫」のあとにこの抄本を筆写したのとは別の筆跡で、「録鬼簿作王翛断殺狗勧夫蕭

徳祥著（顧河之記）」と注記がある。『太和正音譜』や『元曲選』も脈望館抄本の冒頭と同じく「殺狗勧夫」を無名氏の作としている。さらに、同じ題材の作品として四大南戯の一つに数えられる『殺狗記』があるが[23]、その古い形とも考えられるものが、徐渭『南詞叙録』の「宋元旧篇」のリストに「殺狗勧夫」として載っており、さらにさかのぼって『永楽大典』目録巻三十七には「楊徳賢婦殺狗勧夫」がある。

以上のように「救孝子」と「殺狗勧夫」は、ほぼ同じストーリーの作品が雑劇・戯文それぞれに存在したようであるが、前後関係は不明である。ただ、王脩然が金人であることから考えると雑劇が先に作られた可能性が高いであろう[24]。本稿の対象である雑劇については、かりに雑劇「殺狗勧夫」が蕭徳祥の作品ではないとしても時期的に「救孝子」よりあとに作られたものと推測される。その根拠としては、たとえば、王脩然は『金史』や『帰潜志』に記された経歴に「知大興府」があり、「救孝子」で大興府の府尹として登場するのはこの事実と一致する。しかし「殺狗勧夫」では注19にも記したように開封府の府尹、しかも時代は宋代仁宗治下に設定されている[25]。これは王脩然についての事実が忘れられ、同じように剛直な裁判官として有名な包拯の属性をまとって登場させられているということではないだろうか。

そして、それだけ実像から離れながらも「殺狗勧夫」で最後に裁き（というほどのものではないが）を下すのが王脩然であるのは、「救孝子」を踏まえているからではないであろうか。以下、「殺狗勧夫」が「救孝子」のいくつかの要素を再配置させたり反転させたりしながら作られたのではないかという点について検討してみたい。

先ほど最後に引用した「殺狗勧夫」の楊氏のせりふの中に「救孝子」の本文中に頻出した言葉がある。「屍親」である。元曲でこの語が用いられている作品は「救孝子」と「殺狗勧夫」のみである。「救孝子」の用例からもわかるように、屍親とは殺人事件の被害者（死者）の親族を指し、死体が発見されると裁判の手続き上、屍親がそれ

を本人であると確認することが必要とされていた。「屍親が死体をそれと認めていないのに犯人として死罪にしていいのか」という叫びは李氏と楊氏に共通するものである。つまり、「殺狗勧夫」にも「不認尸」（「救孝子」の別称）という状況が出来しているわけである。

二作品の構造は細部を無視してあえて単純化すれば、次のような対称性を呈している。

・「救孝子」では、賽盧医が悪知恵をはたらかせて梅香の死体を春香に見せかけ、そのために無実の楊謝祖が訴えられる。
・「殺狗勧夫」では、楊氏が賢知をはたらかせて犬の死体を人に見せかけ、そのために無実の孫栄・孫華が訴えられる。

そして事件の真相もまた対称性を示している。

・「救孝子」において、春香は殺されてはいなかった。[26]
・「殺狗勧夫」において、殺人は起こっていなかった。[27]

つまり、いずれにおいても人命に関わる事件は起こっていないので、そもそも屍親はいない。楊謝祖も孫栄・孫華も、関係のない事件に巻き込まれたと感じていたであろうが、実は関係がないだけではなく事件は起こってもいなかったのである。にもかかわらず、事件が起きたかのように裁判が行われた原因は、いずれも死体を偽装すると

いう行為であり、当人（あるいは犬）のものではない衣服をかけるという方法も共通であった。

一方で、相反しているのがその意図である。偽装が行われるのは一般的には悪意によることが多いだろう。「救孝子」はその一例であるが、「殺狗勧夫」では善意から行われている。真実を隠すための偽装ではなく、真実をあらわにするための偽装。「殺狗勧夫」のストーリーはこのように「救孝子」を反転させたものと考えられる。[28]「救孝子」において楊家は円満な家族であり、それを脅かし真実を偽装する者はこの家族の外にある悪人であった。しかし、もしも善意から偽装を行って真実を知らせなければならない場合があるとしたらどのような状況が考えられるか。その一つが、家族の内に不和があり、言葉の力だけではどうしてもそれを解消できないという「殺狗勧夫」の状況であったのではないだろうか。

その結果として、兄弟の関係は相反するものとなる。「救孝子」の兄弟は、本人たちは知らなかったのかもしれないが母親がちがう。しかし一緒に暮らし、得意分野は文武を異にするもののそろって孝子であり仲もいい。「殺狗勧夫」では同じ両親から生まれた兄弟であるにもかかわらず、兄は弟をいじめて別々に暮らし、名ばかりの義兄弟たちにうまく利用されていた。

二作品の歌唱者は李氏（正旦）と孫華（正末）である。戯曲のうたは一般に、現実には言葉として発話できないような胸の思いを表現して劇中の緊張を高めるものであるが、これらの二作品ではいずれも虚偽におおわれて真実を見ない人へのやりきれない思いが吐露されている。すなわち、「救孝子」では、訴えられたあとで楊家の真実が見失われそうになる後半で、「殺狗勧夫」では、真実を見失っている兄から繰りかえしひどい仕打ちをされる前半で、自らの境遇を嘆く痛切な曲詞によって劇的緊張を高めているのである。

また、相反する状況に対応するかのように設定されているのが作品中の季節感である。「救孝子」では先の引用

箇所にも「六月」とあったように季節は夏であり、検屍を拒む役人が口実にするのはその暑さである。「殺狗勧夫」には清明節の場面があるので季節は明らかに春だが、孫華が大雪の中で倒れていた孫栄を背負って家まで送り届ける場面が強く印象づけるのは冬のような寒さである。

以上の点は、偽装の意図の善悪のちがいという最大の対立点から派生した対照的要素であると解釈することができるだろう。

そして、最後に王翛然が裁きを下す。「救孝子」では、王は最初と最後に登場して、楊家の人々の人柄を見抜く能力、裁判の不備に気づく能力、妥当な判決を下す能力を発揮しており、剛直な裁判官としての王翛然の実像を残している。しかし「殺狗勧夫」になると、先に無能な役人が誤った判断をして王がそれを覆すという場面もなく、[29] 王は楊氏の事情説明のあとでは当然ともいえる判決を下すだけで、裁判官としての個性はきわめて薄い。にもかかわらず裁判官が王であるのは、「救孝子」を組み替えた結果として、同じ名が残ったということではないだろうか。

おわりに――あらわになった真実

「救孝子」と「殺狗勧夫」において王翛然は、最後に判決を下すとはいえ事件について推理したり何らかの方法で真実を見破ったりするわけではない。ほとんど何もしていないといっても過言ではないのだが、だからといってこの裁きの場はなくてもいいということにはならない。もしもこの場がないとするなら、劇中において事件の全貌が明らかにならないからである。

実はこの二作品において一貫して真実を見破っているのは李氏あるいは楊氏である。李氏はずっと楊謝祖が殺人などしていないとわかっているし、楊氏は孫栄が二人のごろつきに巧みに騙され利用されていると知っている。しかしそれは観客／読者から見れば真実であっても劇中にあっては二人の信念にすぎず、ほかの人々を説得できるだけの決定的な証拠がない。それは有限な存在である人間が現実世界において日々経験する状況と重なるものである。

「救孝子」においては、たとえ訴訟の場がなくても楊興祖が春香を見つけて連れ帰れば、真実は半ば明らかになっただろう。春香は生きている、ゆえに謝祖は殺していない。しかし、春香の母親が役所に訴えていたからこそ、王翛然の元に李氏と謝祖、興祖・春香・賽盧医が顔をそろえ、残りの真実――梅香が死んだこと、賽盧医が梅香を推官の家からかどわかしたこと、さらに春香を脅迫して連れて行ったこと――のすべてが明らかになったのである。「殺狗勧夫」においては、孫華が埋めたのが人ではなく犬であることは計略を立てた楊氏がいちばんよく知っている。しかしこちらの場合もまた、王翛然という第三者によってそのことが確認される必要があった。そうでなければ悪知恵のはたらく柳隆卿・胡子転の二人によって真実は再びうやむやにされかねない。だからこそ楊氏は意図的に「事件」を作りだし、裁きを求めたのである。

滋賀秀三によれば、帝制中国の刑事裁判は、「われわれが裁判というものの本質と考えるところの、相争う主張に対して公権的に下される判定という性格」をもっていなかった。「判定とは、真実そのものは誰も知ることができないことを前提としながら、しかも真実を知るべき差迫った実際的必要があるために、特定人の判断を以て真実に代置することにほかならない。勿論その判断には、真実への近似性――人間わざとして考えうる最高度の近似性――が保証されていなければならない」。それを保証するのが裁判の機構と手続であり、裁判官は手続を守ることを要求されると同時に、手続きは裁判官を守る。判定は真実そのものではないので、上級審によってくつがえさ

れることがあっても裁判官が個人的に責任を問われることはない。これがわれわれにとっての裁判である。

ところが、「中国の裁判官は右のような意味での判定を委ねられた者ではなかった。彼が任としたのは、むしろ真実そのものをあきらかにすることであった。行為をめぐる真実は、行為者本人が最もよく知っている。その本人の心服をかちとって、その口から真実を語らせること、それが裁判官の任務であった」[30]。

しかし、真実そのものを明らかにすることなどできるのだろうか。現実には、それはさまざまな意識的あるいは無意識的な虚偽におおわれていることだろう。だからこそ、このほとんど不可能な任務を全うすることが可能だと考えられた裁判官がいたとき、その人物について伝説が語られ始める。そして伝説は、語り物・戯曲・小説となって語りなおされ演じなおされて増殖していく。裁判劇はこうして理想の裁判を演じることになり、裁判官は人知を超えた能力を発揮することにもなったのである。

本稿が論じた裁判劇においても、衣服が死体をおおい、虚偽の言葉が真実をおおっていた。だが、想定されたような殺人事件は起きていなかった。それでも、おおわれていた真実が最後に明らかになるという意味で、やはり裁判劇なのである。そして、劇中世界の外にあって劇中で展開するすべての場面に立ち会い、すべてを見通しているのが観客／読者である。裁判劇が観客／読者にもたらすもの――それは、劇中の裁判官以上に、すべての真実を知っているという非日常的体験、現実には不可能な全知の体験であった。真実があらわになり、世界の均衡が回復されるのを目の当たりにした観客は、その体験を経て自らの限りある現実へと帰っていく。そのとき現実は、少しちがったものになっているのかもしれない。

注

（1）公案劇としては包公戯（包拯が裁きを下す劇）が有名であるが、それ以外に六案都孔目の張鼎が事件を解決する作品も二つあり、廣瀬玲子「変奏されるドラマ――元雑劇「魔合羅」「勘頭巾」試論――」（専修人文論集83、二〇〇八）では、二つの劇の構造の類似性について考察した。本稿は王翛然が事件を解決する二つの作品を論ずるという点で、この前稿の続篇ともいえる。

（2）吉川幸次郎「元雑劇研究」（『吉川幸次郎全集』第十四巻、筑摩書房、一九六八）、二〇四―二〇五頁。『帰潜志』の該当箇所（巻八）の原文は「其為吏之名、至今人云過宋包拯遠甚」（劉祁『帰潜志』、中華書局、一九八三、八二頁）。

（3）現存する本劇のテキストは元曲選本のみである。以下の引用は王季思主編『全元戯曲』第三巻（人民文学出版社、一九九九）による。各人物が最初に登場する箇所にのみ人物名（固有名とは限らない）に傍線を付す。

（4）王婆婆は登場してこの状況を述べてすぐ退場する。そのあとに楊家が春香を里帰りさせる場面があるが、王婆婆が楊家にやってくる場面は次の第二折で、春香が出立して半月後である。つまり、楔子の王婆婆は半月後の状況を先取りしたものということになる。元雑劇では場面は時系列に従って展開するのがふつうであり、たとえば急に時間が経って一年後に話が飛ぶということはあるが、このように時間が前後することは珍しい。結果的には、楔子と第二折でほぼ同じせりふが繰り返されることで、何が起こったのか知らない王婆婆がやきもきしながら娘の帰りを待っていることが強調されている。ちなみに、楊家は西軍荘、王家は東軍荘にあり、村の名前からして隣村であろう。

（5）「賽盧医」とは春秋時代の名医扁鵲（盧の国に住んでいたので盧医と称す）にも匹敵するほどの名医という意味だが、元雑劇の登場人物としてはつねにやぶ医者で悪役である。

（6）「推官」は官名。元・明では各府に一名置かれ、訴訟を担当した。

（7）ここで「冤屈」という語が用いられていることに違和感があるかもしれないが、「冤」という言葉は冤罪だけを意味するものではなく、真情を認めてもらえないことがすべて冤である（滋賀秀三『清代中国の法と裁判』、創文社、一九八四、五〇頁　注124）。

（8）推官は無能な役人という道化役であり、登場詩も「小官姓鞏、諸般不懂。雖然做官、吸利打哄」（わしの姓は鞏、何もわからん。役人をやってはいるが、いい加減にごまかしているだけ）である。この場面でも王婆婆や李氏への応対は令史に任せて何もしない。元雑劇では最後に有能な役人が登場して判決を下す前に、無能な役人、あるいは拷問で無理やり自白させたり賄賂をもらって手加減したりする悪い役人が登場するのが常である。

（9）火葬が政府の禁令にもかかわらず実際には広く行われていたことについては、宮崎市定「中国火葬考」（『中国文明論集』岩波文庫、一九九五）に詳しい。

（10）この箇所で令史が検屍の時期を限定しているのはでたらめであろう。もしも時期によって検屍をしないことになっているのであれば、その時期をねらって殺人を犯す者が出てくるはずである。ただし、『元典章』巻四三によれば、温暖な時季には屍親が

いない死体の状況を図に描いたうえで埋葬することもあった。また、検屍についての宋代の書物である『洗冤集録』には、時間の経過による遺体の変化が季節ごとに記されている（宋慈著、高随捷・祝林森訳注『洗冤集録訳注』上海古籍出版社、二〇〇八、五三頁）。本劇で検屍のしかたについて触れている箇所の内容も『洗冤集録』の「洗罨」の項と一致している。

（11）謝祖が自白する場面はないのだが、気を失うような拷問をしているので、無意識のうちに発した声を自白と見做したということだろう。

（12）張千は下役として役所の場面に多く登場する。李万が登場する元雑劇には『蝴蝶夢』『後庭花』『延安府』『碧桃花』などがあるが、いずれも張千以下のほんの端役であり、性格というほどのものはない。

（13）本劇の現存テキストには脈望館抄本（孫楷第によれば不知来歴抄本の一種）・元曲選本がある。王季思主編『全元戯曲』第五巻（人民文学出版社、一九九九）一五二頁の「劇目説明」は、この二種は話の筋には大きな違いはなく、部分的に文字の異同があるのみとする。話の筋についてはその通りであるが、文字の異同は随所に見られ、『全元戯曲』の校記はそのごく一部しか指摘していない。「救孝子」の現存テキストが元曲選本のみであるので、本稿では「殺狗勧夫」についても元曲選本を底本とする『全元戯曲』に拠ることとし、脈望館抄本との主要なちがいは注記する。あらすじを記すにあたっては、各人物が最初に登場する箇所にのみ人物名に傍線を付す。なお、日本語訳は、池田大伍訳・田中謙二補注『元曲五種』（平凡社東洋文庫、一九七五）に収められている。

（14）この二人がいくつかの劇に登場することについて、岩城秀夫は院本の挿演と関連づけて次のように述べる。
『殺狗勧夫』『東堂老』『冤家債主』などで、長者や放蕩息子にたかる与太者に、柳隆卿と胡子転というのがいるが、同名の人物がいくつかの雑劇に登場し、似たような事を演じるのは、おそらく基づく院本があって、これが適宜挿演されていたのであろう（『中国古典劇の研究』、創文社、一九八六、第一部第三章「道化役の扮装」、一一七頁）。

（15）抄本では、このあとに「楔子」と記されているので、ここまでは楔子のさらに前置きということになる。また、二人は水で薄めた酒の瓶をわざと倒してごまかそうと企むが、元曲選本では実際に倒す場面があり、抄本にはその場面はない。

（16）抄本ではここまでが第一折である。

（17）原文は元曲選本では「穿上人衣帽」、抄本は「穿上人衣服」に作る。

（18）抄本ではここまでが第二折である。

（19）王脩然は登場すると、開封府の府尹であると自己紹介するとともに、「方今大宋仁宗即位、小官西延辺纔賞軍回来（今は大宋の仁宗が位にあり、わしは西方の辺境で軍をねぎらって帰ってきたところだ）」と述べる。王脩然が金代に実在した人物であることがすでに忘れられていたということであろう。

（20）孫楷第『元曲家考略』（上海古籍出版社、一九八一）、六六頁。

(21) 銭南揚『宋元戯文輯佚』（上海古典文学出版社、一九五六）、五八―五九頁。新版（中華書局、二〇〇九）では六七―六八頁。銭南揚が曲譜にわずかに残る曲をもとに推測している「何推官」のあらすじは、確かに雑劇「救孝子」に似ている。

(22) 厳敦易『元劇斟疑』（中華書局、一九六〇）は、蕭徳祥の作として挙げられている題目がすべて南戯である可能性もあると考える（上冊「四十　蝴蝶夢」、三四一―三四五頁）。

(23) 『殺狗記』では兄と弟の名前が逆になっている。

(24) 鄭紹基主編『元代文学史』（中国社会科学出版社、二〇〇七）、四三一頁。

(25) 「救孝子」の最後の場面は開封府であるが、王翛然はあくまでも大興府尹であり、審囚刷巻のためにやってきたという設定である。また、君主の呼称は「郎主」（遼・金など北方異民族の君主に対して用いられる）である。ただし、厳敦易前掲書（注22）によれば、反映されている制度は金代ではなく元代のものである（下冊「八十六　不認屍」、七五三―七五八頁）。

(26) 梅香の死因ははっきりしないものの（産褥死であろう）殺されたわけではない。

(27) 実際に殺されたのは犬であった。

(28) その前提として、「錯認屍（死体を見誤る）」というモチーフが存在したことを示すのが、先ほど言及した南戯の「何推官錯認屍」や清平山堂話本『雨窗集』「錯認屍」である。

(29) 裁判劇にはしばしば無能な役人による滑稽なやりとりの場面があり、それが金の院本を継承するものと考えられることは田中謙二「院本考――その演劇理念の志向するもの――」（日本中国学会報20、一九六八）[『田中謙二著作集』第一巻（汲古書院、二〇〇〇）所収]が論じているが、「殺狗勧夫」では、役人の代わりにごろつき柳隆卿・胡子転の二人が悪知恵をはたらかせる場面が挿演されていると考えられる（注14参照）。

(30) 以上、滋賀秀三の引用は『清代中国の法と裁判』（創文社、一九八四）、七〇―七一頁。傍点は原著者による。